

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

中国トン族の村における空間意識と歌をめぐる： 貴州省黎平県岩洞寨を中心として

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): トン族, 村落, 空間意識, 信仰, 歌謡 キーワード (En): 作成者: 牛, 承彪 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006044

中国トン族の村における空間意識と歌をめぐる*

— 貴州省黎平県岩洞寨を中心として —

牛 承 彪

要 旨

トン族村における空間意識は、「生業空間」と「生活空間」に分けられ、「生活空間」はさらに居住区域によって細かく分けられている。「生活空間」はその外に比べれば安全で清潔である。「攔路歌」行事はこの意識に基づいて成立し、歌の掛け合いを通して、村に入る来客の穢れを落とすのである。

村には聖域として、「鼓楼」・「薩壇」・「土地神」の祠・大木・大きい石・橋・墓地などがあり、「生活空間」の中に点在している。「鼓楼大歌」が行われる際、村の守護神を降臨させ、参加者と空間を共有するので、この行事は男女の交流を目的にすると同時に神を楽しませる性格を持つ。聖域以外は俗の空間であるが、日常の中では人間の目には見えない「鬼怪」がさまよったりする。それで常に清潔を保つようにしなければならない。また死後いくとされる場所は、「ダイダン川」「十八羅漢山」「平白地」「九十九瑤」があり、「この世」と同じ地平線の山中に位置する。

キーワード：トン族、村落、空間意識、信仰、歌謡

トン族の歌をめぐる行事は数種類あり、信仰と関わったり、禁忌事項を伴ったりするものが多い。歌われた歌の内容にもそれが反映されている。これらめぐる、調査対象者に尋ねてもいつも納得できる回答が返ってくるとは限らない。彼らが私たち外部者とは異なる意識体系を持っていることは常に感じていた。しかしそれはいったい何であり、どのように把握しているかが悩みの種になっていた。調査研究が進むにつれて、彼らは独特な「空間意識」を持っていることに気付く。これを手がかりに、彼らの意識体系の一側面を解明することができるのではないかと思う。

本稿ではトン族の一つの村を中心に、彼らの「空間意識」を考察し、その「空間意識」と歌行事との関わり方を明らかにしたい。

一、村という空間

トン族は主として、貴州省・広西チワン族自治区・湖南省の隣接した山間地域に居住してい

る。この地域は貴州高原（標高1000～1500メートル）の東南部に位置し、起伏に富んだ山脈が多いのが特徴である。トン族の村は星々のようにその広大な地域の谷間に散在している。

現在手元にある資料に基づいて、典型的なトン族の村の特徴をまとめると、次の通りである。

- (1) 山々に囲まれている。
- (2) 盆地と山の斜面に田圃が作られている。
- (3) 盆地と山が接するところに家屋が建てられている。
- (4) 村を流れる川がある。
- (5) 川が村を抜き出る場所に「花橋 (jiuc wap)」¹が掛けられている。
- (6) 村に入る道に「寨門 (dol menc)」²が設けられている。
- (7) 集落の中心位置に「鼓楼 (dees louc)」³が立てられている。
- (8) 「鼓楼」の近くに「薩壇 (dangc sax)」または「薩房 (yanc sax)」⁴が建てられている。

(1) から (4) は自然の景観で、(5) から (8) は人文的景観である。貴州省榕江県の一部の村が山から離れた川沿いの平坦な地に位置するのを除けば、三つの省・区における「南トン」の村は基本的には以上の特徴を持つ⁵。

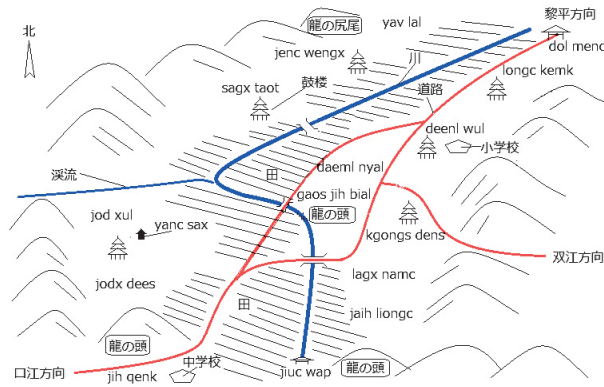
トン族の暮らす地域は古代から有名な杉の産地でもあるので、土地が肥沃で、緑が豊富である。山と水に恵まれた美しい自然環境とともに、木造の家屋・「寨門」・「鼓楼」・「風雨橋」・「薩房」といった民族文化を象徴する建造物が調和のとれた村の景観を作り上げている。自然環境の差により、村の景観もそれぞれ自分の特色を見せ、桃源郷を思わせる神秘的な魅力で、外部の観光客を引き寄せている。閉鎖的な自然環境により、村では昔ながらの生活様式を多く保っているため、生産生活・民俗行事なども観光資源になっている。

トン族村の民俗・文化、および人文的景観は早くから研究者の関心を呼び、調査研究が進められている。しかし中国において宗教信仰の領域は長い間タブーであった影響で、この信仰分野の研究は比較的遅れている。村人の日常生活に深く関わっているシャーマニズム的行事はほとんど取り上げられていない。村における実地調査で実感したのは、これらの信仰は「迷信」という名札で村人の生活に融着し、強い生命力をもっていることである。トン族村人の信仰には独自のものもあれば、外部の影響を受けたものもあり、複雑な体系をなしていることが伺えるが、その形成に居住環境と深く関わっているのは明らかである。

上の (1) から (8) は外部から見た特徴であるが、村人の中ではどのような意味を持ち、どのように意識されているだろうか。ここでは貴州省黎平県岩洞寨の場合を中心にみてみる⁶。

(一) 山・川と「風水」

岩洞寨で実地調査を行った際、何回か村の風水に関する話しを聞いた。村の巫覡的身分の「鬼師 (jangh xeit)」を対象に聞き取りを行った時、これについて詳しく尋ねた⁷。それによると、村の西側の山は「雄の龍」であり、頭は南、尻尾は北に位置する。また、村の東側の山は「雌の龍」であり、頭は村の中心部 (小高い丘) に位置し、尻尾は北東方向へ延び、岩洞寨からおよそ5キロ離れた「新洞」という村に達している。さらに、南の「花橋」の近くにもう一匹の「龍」がいるが、尻尾は南東方向の「せ洞」という村に達している (「図表1」を参照)⁸。



図表1：岩洞寨イメージ図

「風水」は元来漢族の文化で、主として家屋と墓地の場所を選ぶ時、「陰陽五行」の原理を用いて自然環境を総合的に評価する「学問」である。その中で、山の形状がもっとも重視され、山脈を「龍」などに譬えている。トン族の先祖は長江の南に住む「百越」の中の「骆越」とされており、蛇を信仰対象にしていることがよく知られている。しかし現在のトン族における「龍」の信仰は、おそらく漢族の影響を受けたものだろう。

現在は「信仰する」人が少なくなって、「龍」の形も破壊されたと調査対象者は残念な気持ちで言う。たとえば、「雌の龍」の頭の部分は、昔は小高い丘になっており、深い洞窟が一つあって、「龍」が棲む神聖な場所とされたが、新中国に入って、「供销社」⁹、及びその職員の宿舎が建てられ、その後洞窟も埋められて、多くの民家が建てられるようになった。今の中学校の場所も、昔は丸い形の小高い山になっており、「龍珠」¹⁰と呼ばれ、三匹の「龍」が頭を向けていた神聖な山であったが、その後山が削られ、中学校を建設したと言う。また西側の「龍頭」の麓に「土地神」¹¹を祭る祠があったが、文化大革命のときに破壊され、その後個人の納屋が建てられた。近年になって村の風水を害する恐れがあるとの老人たちの意見で、納屋は取り壊されたという。「龍」が村を取り囲むことで、村はいい風水 (運) に恵まれるという意識が存在するのである。



写真1：山から俯瞰した岩洞寨（2012年7月撮影）

村の中心を流れる川も風水と深く関わる。トン族の生活は古来、水に頼る部分が多い。中国の史籍では、「百越」の生活様式は「飯稻羹魚」と述べられている¹²。現在も稲と魚はトン族の主食になっている。村落の位置をめぐる、「トン族は山の麓、ミャオ族は山の中腹、ヤオ族は山頂」といわれるように、近隣のほかの民族に比べても、トン族はより川辺の暮らしを重視している。「風水学」が流行る漢族地域で家を建てる時は、日差しがよく当たるよう、南向きに家を建てるが、トン族は「川向き」に家を建てる。川が氾濫すると大きく成長した「龍」が海に戻るのだという言い伝えもある。トン族の村において、「花橋」を掛けるのは、「良い風水」を堰き止めるためであるが、橋はまた村人の信仰対象になっている¹³。

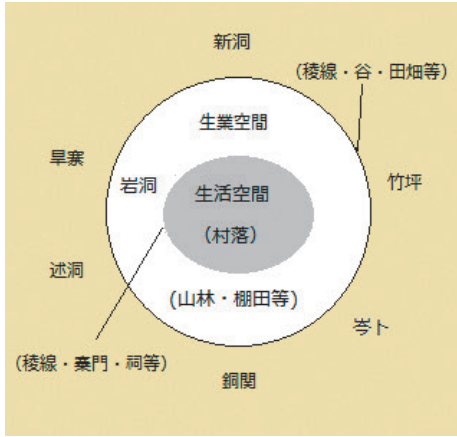
（二）村落の内・外と「攔路歌」行事

トン族村の生業である稲作と植林について聞き取りを行ったとき、岩洞寨所有の山林と田畑の範囲を教えてもらった。南は岑卜・銅関、西は述洞・旱寨、北は新洞、東は竹坪というように、ほかの村の山林と田畑に接している。境界の基準は山の稜線と谷であり、山がないところは、稜線や谷の延長線をもって決め、その境界線に石を積んで標識にするという¹⁴。すなわち、岩洞の周りにはほかの村と接するラインが存在する。

しかしその内側に、もう一つラインが村人の意識にある。村落を意味する「寨」である。その範囲を確認したところ、(一)で述べた、村落を取り囲んだ「龍」の稜線が描いたラインと大体一致することがわかる。稜線は天然の境界線になっており、村落内を細かく区切る場合も周囲の山の稜線と谷を基準にしている。盆地部分においては、村を囲む山が盆地まで伸びたやや狭い場所に境界があり、これも山脈の延長線で決める。

この二つのラインが描いた空間を「生業空間」・「生活空間」と呼ぶことにする（「図表2」を参照）。「生業空間」では、棚田・畑・山林等が営まれ、「生活空間」は集落を中心とした、

日常の生活を営む空間である。



図表2：
岩洞寨の「生業空間」「生活空間」のイメージ図

岩洞寨の環境と地名をめぐって聞き取りを行ったとき、調査対象者は、昔、外へ出かけるときは、必ず「寨門」の傍にある「土地神」に無事を祈ったという¹⁵。岩洞の「寨門」近くの「土地神」の祠はすでに破壊されたが、岩洞の南に位置する宰拱村にはあるので、その様子を知ることができる。「土地神」を祭る祠は盆地に接する山の麓に山肌を掘って造られ、その前には休憩するための「亭子」(屋根だけある建物)まで設けられている。村に入る道は山を旋回しながらこの位置まで下り、ここから橋を渡って村に入るので、ちょうど村の入り口にあたる。「土地神」の祠と「寨門」

はともに「生活空間」と「生業空間」の境界線の標識になっているが、現在は「寨門」だけを建てるのが一般的である。小さい村の場合、村を通り抜ける道路の出入りにそれぞれ「寨門」を作る。黎平県双江郷黄崗村は山に囲まれた楕円形の盆地に位置し、盆地を抜ける出入りに、従江県小黄村方向に一つ、黎平県双江郷方向に一つ「寨門」が作られている。黎平県肇興郷堂安村は山の中腹に位置し、道路は村の中を通ってはいないが、それでも下方から村落に入る道に「寨門」が一つ、上方の田畑へ行く小道に一つ作られている。岩洞寨は比較的大きい村で、車が通る三つの出入り口があるが、もっとも重要な出入り口(黎平県方向)の道路に立派な「寨門」が作られている。門は一つの空間からもう一つの空間へ移動する出入り口であることは言うまでもない。現在「寨門」はトン族村という空間の境界線を表したもっとも顕著な標識になっている。



写真2：岩洞寨の「寨門」(2011年9月撮影)

「土地神」の祠と「寨門」は、いずれも「生活空間」と「生業空間」の境目に作られているが、機能は異なる。「土地神」の祠は村人のために設置したものであるが、「寨門」は外から入る者のために設けたものである。村落を出るとき、「土地神」の保護を祈願する行為は、村落の中は神の庇護を受けて、安全で清潔であるが、村外は危険で穢れた空間である意識が根底にあるだろう。「寨門」で行われる客人を迎える行事はその意識をよく表している。

お正月になれば、トン族村の間では親睦を深めるための訪問行事「ワヒェ (weex yeek)」が行われる¹⁶。このとき「寨門」の道路は縄・長椅子・籠などの生活道具で遮られ、それを挟んで主人側と来客側は「攔路歌 (Kgal sagp kuenp)」の掛け合いをする。岩洞寨の「攔路歌」には次の一首がある。

(1)maenl naih xaop daengl diiul jih jaih / Bemx diinl bemx kaik sagp biingx bial/ Muix lis samp maenl jah nyac kgaov sedp/ Muix lis tedp maenl is jav nyac kgah daengl / Muix lis tedp maenl nyac daengl touk/ Qait maenl lagx nguap lagx nguuk siit weex dagl bal/ Edl jih qait kgal nyih qait soh/ Edl qait liongc ngoh siit nyih liongc gal / Lagx kgaiv geel dous maenl naih nyac daengl touk /Nghanh ngac kgeis biinv siit yinv yuih nyac/ Nghanh ngac kgeis biinv yinv yuih juh / Yinv yuih kgul maix geel liaih/ Maenl naih nyac kgus map .(2)maenl naih xaop daengl diiul jih jaih / Naih diiul jih jaih siit eengv jih singp/ Naih diiul jih singp jah kgeis haengt nyenc meik laos/ Nyenc meik laos jaih / Is jav kgaiv kgeis xeengp. (3)maenl naih xaop daengl diiul jih jaih/ Naih diiul jih jaih siit eengv jih dol/ Naih diiul jih dol jah kgeis haengt nyenc meik laos / Nyenc meik laos jaih / Is jav jaih kgeis wop.

(〈1〉 今日お客さんが訪れてきたけれども、私たちは「忌寨」をする/石で壁を作り寨門を遮る/三日以内は見知らぬ人を入れさせない/七日以内は見知らぬ人を入れさせない/七日間経っていないのあなたたちは来た/村の子犬が踏まれ、子豚は足が折れる/一は声が踏まれ、二は歌が踏まれる/三はタウンギが踏まれ、四は龍王が踏まれる/雛が殻を割るのあなたたちは今日来た/鶯鳥が病気になるばすべてあなたたちのせいだ/鶯鳥が病気になるのは恋人のあなたのせいだ/恋人が/今日わざときたのが原因だ。〈2〉 今日お客さんが来たが私たちは「忌寨」をする/「忌寨」をするだけでなく「寨門」まで忌む/私たちが「寨門」を忌み見知らぬ人を入れさせない/見知らぬ人が村に入れば/鶯が病気になる。〈3〉 今日お客さんが来たが私たちは「忌寨」をする/「忌寨」をするだけでなく「忌家門」もする/私たちが「忌家門」をするので見知らぬ人を入れさせない/見知らぬ人が村に入れば/村は穢れる¹⁷。)

「忌寨 (xih xaih)」は、火事など村全体の安全を脅かす事件があった場合に、「忌家門 (jih dol)」は、個人の家庭に病人が出たり、トラブルなどに遭ったりする場合に行われるもので、

いずれも「鬼師」によって祓いの儀式を行い、一定の期間を設けて外の者を入れないようにする。

歌詞で表したように、外の者を村に入れると、「子犬が踏まれ」「子豚は足が折れ」「声が踏まれ」「歌が踏まれ」¹⁸「タウナギが踏まれ」「龍王が踏まれ」「鷺鳥が病気になる」「鶏が病気になる」のである。実際、「忌寨」や「忌家門」のとき、「寨門」や家の門に、茅で作った結びを取り付けるので、それを見た外の者は自ら回避する。「忌寨」の期間に村を通り抜けるために来た者でも、遠回りしなければならないという。「忌寨」「忌家門」云々は口実に過ぎないのである。

さて、客を迎えるのに、どうして村の境界である「寨門」で道を遮って歌の掛け合いをするのだろうか。2012年筆者が調査地の黄崗村でその現場に遭遇し、行事の進行状況を伺うことができた。しかしこのときは、村の行事に参加しにくる政府の方や観光客を迎えるために行われたもので、来客との掛け合いは実現できなかった。主人側が一首の「攔路歌」と一首の「勸酒歌」を歌うだけである。時代とともに伝統文化が変遷し、その文化を支える信仰や観念が薄れていく現状を見せてくれる事例である。その後岩洞寨で「ワヒエ」をめぐって聞き取りを行い、40首の「攔路歌」を採集した。その状況や歌詞からこの行事の根底にある信仰・観念を知ることができる。



写真3：黄崗寨の「攔路歌」（2012年8月撮影）

歌は21首の「攔路」の歌と19首の「開路」の歌からなる。「攔路」の歌は道を遮る「理由」を歌い、「開路」の歌はその「理由」が成立しないことを訴える、または問いに答える内容になっている。21首の「攔路」の理由は大きく、村の事情に関するものと来客に関するものに分けられるが、村の事情に関するもの（9首）には、「忌寨」「忌寨門」「忌家門」「村の会議」「お役所の忌み」などが挙げられ、来客に関するもの（12首）には「この道が悪い」「わざと道を遮る」「山の麓は崖である」「あなたたちは誰なのか」「私たちは知り合いではない」「門龍はどこへ行ったのか」などが挙げられている。村は清潔を保っている状態であること、来客の

正体と道のりを明らかにさせることが趣旨になっている。

当日は多くの障害物が道に置かれ、主人側の「攔路歌」に客側が対応した「開路歌」を歌えば、障害物が一つ取り除かれる。掛け合いが進むにつれ、障害物が一つ一つ取り除かれ、すべてなくなれば、盛大に村に迎えられるのである。「寨門」を遮った様々な道具は、掛け合いの歌の「力」によって、一つ一つ取り除かれるのであり、掛け合いの歌によって、来客の身についた穢れが取り除かれることになる。歌はすべて架空のことを内容にしており、それをめぐって双方が応酬するのである。したがって、この遊戯的性格を持つ歌行事は、完全にトン族村の「空間意識」に基づいて成立していることがわかる。

(三) 居住区域の内・外と「鼓楼大歌」行事

岩洞寨は800戸余りの大きい村で、いくつかの居住区域に分けられている¹⁹。これらの居住区域はもともと宗族によって分けられたものであるが、時間が経つにつれ、ほかの成分も加わっている。居住区域の間ははっきりした境界線を持ちながら、岩洞寨の「生活空間」を区切っている。「図表1」で示したように、各居住区域には地名が付けられている。

地名の意味や居住区域間の親縁関係を下の表にまとめる。

地名（トン語）・意味	親縁関係
「ゴンドン (Kgongs dens)」・「祖先が最初に住み着いた場所」の意	「ガोजビャ」と義理の兄弟関係。「サタォ」「ラナム」「デンウ」は「ゴンドン」から分離。
「ラナム (Lagx namc)」・「南に住んでいる」の意	「ジャイリョン」と宗族関係
「ジャイリョン (Jaih liongc)」・「大きい集落」の意	「ラナム」から分離（宗族関係）
「ガोजビャ (Gaos jih bial)」・「岩の上の集落」の意	「ゴンドン」と義理の兄弟関係。「ジェンワン」と宗族関係
「デンウ (Deenl wul)」・「集落の上の方」の意	「ゴンドン」「ロンコン」と宗族関係
「ロンコン (Longc kenk)」・「深い森」の意（前に住んでいた場所の地名でもある）	「デンウ」から分離（宗族関係）
「ジャシャォ (Jod xul)」・「上に住んでいる」の意	「ジャデオ」と宗族関係
「ジャデオ (Jod dees)」・「下に住んでいる」の意	「ジャシャォ」と宗族関係
「サタォ (Sagx taot)」・「草魚を養殖する大きい池」の意	「ゴンドン」から分離（宗族関係）
「ジェンワン (Jenc wengx)」・山の名前（前に住んでいた場所）	「ガोजビャ」から分離（宗族関係）
「デアムニャ (Daeml nyal)」・「川のそばの町」の意	構成が複雑（「供銷社」跡地を住宅地として再利用して形成）
「ヤラ (Yav lac)」・集落の前の田圃と後ろの山の名前	漢族の集落（戸数は少ない）

居住区域に地名が付けられたこと、居住区域間の境界に標識として石が積まれたことは、宗族と非宗族の意識、および土地の帰属意識が強いことを意味する。20世紀の初頭、岩洞寨は大きく「ゴンドン」・「シジュ (siik jul)」²⁰・「サタォ」の三つの居住区域があり、それぞれ城壁が作られていた。戦乱の時代でもあって、宗族を守るのが目的であったが、謀反を企てる明かし

の一つとされ、当時の政府軍（中華民国）の攻撃を受けた。村が囲まれ、半月ほどの戦闘を経て、「サタォ」と「ゴンドン」は陥落され、多くの人々が殺された²¹。当時「シジュ」が政府軍に妥協したことについて、ほかの居住区域の老人は100年近く経った現在も怨みの気持ちを抱えている。宗族の居住区域を城壁で囲むこともまた宗族意識と土地の帰属意識の表れであろう。文化大革命以前までは、各居住区域の出口に「土地神」の祠が設けられ、出かける人は必ずここで無事を祈る。家族の人や家畜が病気になった時もここに来て香を焚いたり、「紙銭」を焼いたりしたという²²。宗族を中心に生活している居住区域は外に比べて安全であり、清潔であるという意識は、時代を遡っていけば行くほど強いものだっただろう。

毎年のお正月、岩洞寨の各居住区域の間では、親縁関係のない方の娘たちを招いて、「鼓楼」で、歌の掛け合いを展開する。この行事は「鼓楼大歌」と呼ばれ、昔は4日間行われたが、今は2日間で終わる。2012年春節、筆者はこの行事の実地調査を行ったが、当時娘たちを招いた居住区域間の状況は次のとおりである。

「ゴンドン」⇔「デンウ」 （互いに相手の娘たちを招く）
「ジャシャオ」⇔「サタォ」 （互いに相手の娘たちを招く）
「ロンコン」⇔「ガォジビャ」 （互いに相手の娘たちを招く）

「ジャデォ」は榕江県栽麻郷豊登坳村を招いて「ワヒェ」を行ったので、村内の居住区域とは歌の掛けあいを行わなかった。それと関連して「ラナム」と「ジャイリョン」はこの年の行事に参加しなかった²³。「ジェンワン」の住民は政府の支援を受け、山から盆地へ移住する途中であったので、行事に参加しなかった。

「鼓楼大歌」は若い男女グループの間で展開する歌の掛け合いであり、居住区域間の親縁関係の有無を条件にしている。歌われた「大歌」は恋に関するものが基本であり、男女グループ間で交わされた戯れ言を見ても、男女間の交流を主な目的にした行事であることがわかる。すなわち村内の居住区域は単なる地理的観念ではなく、そこに住む住民の親縁関係の意味も含まれている。実際、上述の居住区域の名称は、現地ではその区域を指すだけでなく、そこに住む住民を指す場合も使われている。

2012年岩洞寨の「鼓楼大歌」の進行様子は次のとおりである。

1月27日 午後3時ごろ 「放薩」：「鼓楼」の中で、「鬼師」の煮たお茶を行事参加者が飲む。「薩房」

で参加者の見守る中、守護神「薩」を村に降臨させる。

午後4時ごろ 「請姑娘」：各居住区域は、男性で構成された集団（30～50人）が楽器を奏でるグループ（芦笙7、8人・太鼓1人・銅鑼2人・鉦1人）を先頭に、

相手の居住区域に赴き、美しく着飾った娘たち（20～30人）を迎え、自分の居住区域に引き連れ、「鼓楼」の中を三周する。

午後5時ごろ 「祭薩」：男性集団は楽器を奏でるグループを先頭に、娘たちを率いて村の中心部に集合し、その後鎮政府の前の「薩堂」（「薩」のために歌を歌う場所）へ移動する（「シジュ」では自分の「薩堂」に集まる）。参加者は輪になって「祭薩歌」を歌う。その後、楽器の引率で娘たちは男性集団の「鼓楼」に行き、中を三周して「祭薩歌」を歌い、そして解散する（娘たちは自分の家に戻って着替える）。

夜7時過ぎ 「招待姑娘」：楽器を奏でるグループは相手の居住区域に行き、髪飾りなどを外した娘たちを迎えて食事に招待する。

夜10時ごろ 「鼓楼大歌」：男性集団の「鼓楼」に若い男性チームと招いた若い娘チームが集まり、歌の掛け合いを展開する。翌日2時近くまで続く。

1月28日 午後4時ごろ 「鼓楼大歌」：男性集団は楽器を奏でるグループを先頭に、相手の居住区域に向かい、娘たちを「鼓楼」まで引き連れる。そして前日と同じように、「鼓楼大歌」の掛け合いを展開する。夜7時半ごろ終了する。楽器を奏でるグループは娘たちを相手の居住区域まで送る。

「祭薩」行事は歌をもって「薩」を褒め称え、村人と家畜の安全・五穀の豊穰を祈願するためのものであり、「鼓楼大歌」は男女グループ間で展開する歌の掛け合いであるが、二つの行事は一体になっている。守護神を村に呼び寄せる「放薩」儀式は、絶大の力を持つ「薩」を村の「生活空間」に放出することであるので、「薩」は村の空間を支配し、清めてくれることになる。「祭薩歌」で歌われたように、若者が美しく着飾るのは「薩」を楽しませるためであり、歌声や楽器の音は「薩」を楽しめるためのものである。「鼓楼大歌」の初めに必ず「祭薩歌」を歌うことから、この行事は「薩」を楽しめる性格があることがわかる。

二、聖なる区域と俗の空間

トン族の村落は、宗族を中心に居住区域が分けられているが、宗族ごとに「鼓楼」・「薩壇」（または「薩房」）などと呼ばれる建造物が建てられる²⁴。

「鼓楼」は普段は集会的な建物であるが、「鼓楼大歌」の期間中は「御旅所」的な建物に変わり、村人が「薩」とともに若者の歌の掛け合いを楽しむ神殿的な空間になる²⁵。このとき、「鼓楼」の中に身を置く場合は多くの注意を払わなければならない。「薩」の機嫌を害うと、程度の軽いものは病気になるが、重い場合は命が奪われる。「鼓楼大歌」が終わると、「鼓楼」はま

た「俗」の世界に戻る。

「薩壇」と「薩房」は村の守護神「薩」を祭る場所で、その管理を任された者以外は中に入ることできない²⁶。戯れながら近くを通った若者たちが不注意で扉に接触しただけでも祟るといふ²⁷。黎平県双江郷黄崗村で実地調査を行った時、近寄って中の様子を見ようとする筆者を現地案内者は何回も止めた。村人にとって、ここは畏怖を感じさせる聖域なのである。村全体の行事のときだけ、ここの扉が開けられ、居住区域の住民の見守る中、丁重に祭式を行うのである。

このほか、上に取り上げた「土地神」の祠も聖域にあたる。「土地神」は「薩」の霊力には及ばないが、「薩」よりは親しみやすく、困ったことがあったり、出かけたりするときすぐに拝むことのできる身近な存在である。

さらに居住区域からやや離れた、井戸・橋・大木・石なども信仰対象として祭られ、その所在も聖域に当たる。子供が病気になったりすると、村の「鬼師」に見てもらい、生まれた時刻の属性にしたがって、その子供の「命理」に欠けている要素を補うために、井戸・石・木などを祭るように指示されるのである。

村の墓地は居住区域の周辺、または「生業空間」との境界近くに位置する。トン族の中では亡くなった先祖が子孫を守ってくれることを固く信じており、お葬式は墓所選びから墳丘が出来上がるまでの各過程を丁重に行う。お葬式の当日、「鬼師」は鶏の血を使ったり、祝詞を唱えたりして、くり返し墓穴を清めるが、棺を墓穴に上まで移動したとき、「紙銭」を先端に付けた竹の枝で墓穴の上を振りながら次の内容を唱える。

いい日いい時刻に天地は開く/死者を埋葬するには大吉だ/死者の息子と娘の「身魂」は出て/死者の魂が入る/死者の子孫の「生魂」が出て/死者の魂が入る/豚羊牛馬の「生魂」が出て/死者の「生魂」が入る/五穀豊穡の「生魂」が出て/死者の「生魂」が入る/棺を担いだ若者の「生魂」が出て/死者の魂が入る/「百合仙人」の弟子²⁸の「生魂」が出て/死者の魂が入る/「生魂」が出ないのなら雷が掬って出す/死者が入らないのなら雷があなたを打って入れる

また、棺を下へ降ろす途中と土を盛る寸前、「鬼師」は先端の「紙銭」を燃やした竹の枝で墓穴の中を振りながら「hoik waengh ! hoik naengh ! (走れ走れ)」と叫ぶが、周りの人たちも声を合わせて一緒に叫ぶ。トン族は、人間は「七魂六魄」があると信じる。「身魂」「生魂」は、そういった魂魄のことを指す。葬式は生きた者の魂魄と死者の魂との別れを成立させるのであり、「豚羊牛馬」「五穀豊穡」の「生魂」も追い出している。墓地における「鬼師」の一連の行為はもっぱら墓穴を清めることを目的にしているが、周りの人たちも一体になって働きかけることは興味深い。同じ信仰・観念が人々の中に深く浸透していることを物語る。毎年清明

節になると、親族一同が墓詣りをし、先祖とともに飲食をして、一時を過ごすのだから、ここもやはり聖域の一つになるだろう。

これらの聖域以外は、俗の空間になるが、祭日のときは守護神とともにいる空間になる。お正月の「踩堂歌」・「鼓楼大歌」のほか、同じ時期の「遊寨」や、六月六日の「闘牛」などのときも「薩」を村落に招く「放薩」儀式を行う。身を守るため、参加者全員が「薩壇」管理者の作ったお茶を飲むことになっている²⁹。

俗の空間は村落の外に比べて清潔であるという意識が存在するが、いつまでも清潔であるとは限らない。偶然迷い込んだ「怪」・「天馬」³⁰・「餓鬼」・「白口」などがあり、これらを村落の外へ追い出し、清潔を保たなければならない。「怪」は動物の霊魂のようなもので、人間に追隨して村に入る。たとえば野外で蛇が交尾するのを見かけたら、「蛇怪」はその人に付いて村に入る³¹。病気になったり、災難に遭ったりする場合はもちろんのこと、人と喧嘩した場合、不倫が起こった場合、犯罪で裁判に掛けられた場合もこれらの「鬼怪」の仕業だという。そのときは「鬼師」に見てもらい、「鬼怪」の種類によって、それに合わせた対応策を取る。程度が軽い場合は、依頼者が「鬼師」の指示に従って処置すればいいのだが、そうでない場合は「鬼師」によって駆除の儀式を行う。トラブル関係の問題を解決するための儀式は「小白口」と「大白口」に分けられる。「小白口」は家の中で行い、「大白口」は村外れの辻道で行う。「大白口」は二人の「鬼師」の主導で合計十二人参加する大がかりの儀式であるが、「小白口」は一人の「鬼師」と依頼者が参加する小規模の儀式である。

2012年7月岩洞寨で「小白口」儀式の参与観察をする機会を得ることができた。場所は「ジャシャオ」の一軒の民家である。家の門をくぐれば応接間であり、左側・正面・右側の部屋に入るドアは奥の方にある。左側は寝室になっていて、そのドアの手前の床に臨時の祭壇が設けられている。

儀式は、神を下ろす（「紙銭」を燃やししながら神の名を唱える）→「打掛」（水牛の角で作った二枚の「掛」を床に落とす³²）→祝詞を唱える（三回）→生贄を捧げる（一羽の家鴨を殺す）→神酒を捧げる→祝詞を唱える（三回）→供え物を神前に供える（煮た家鴨の内臓だけ）→神酒を捧げ、「紙銭」を燃やし、香を焚く→「打掛」→祝詞を唱える（三回）→供え物を共食する（神酒を床に少し零してから飲む。家鴨の内臓も少し千切って床に落とし、残りを参加者が食べる）→仕舞う（祭具を片付ける。三本の紙垂を稲わらで束ね、家の門〈外側〉の上部に取り付ける）→神を送る（「紙銭」を燃やししながら祝詞を唱える）、といった順で進行した。その時に唱えた祝詞の内容は次の通りである。

Kgonv kgangs qianc longc deic lix jenl jas qinp deic lix maenx laos daengl guangs xil Hanc fongs Xians tongx minc guoc .gonh lis samp xip jus nyinc 。maenl naih taot jeeuc daih Diih,wanh

jeeuc gongs yuanc 2012nyinc.kgeis nyaoh nyanl noup ,tedp nguedx naih xah tup Muh jis jis 。
 maenl naih xangh senc taik houp,ngox jas is xingk .bux yanc guanl jids ,neix yanc yah daengl
 guanl douh , daems douh xic tagt ,heengp douh xic jagx . Jagx lagx begs kout liaemt Dol ,begs
 songp yah daengl gaos jaih .maenl naih naengl meec ongv gkaot jus jenl ,bedl laox samp Tonk
 ,xangt nyac daih nyih tenp kgongs, aol nyac weex dens weex peep ,weex geel yah daengl weex
 dav .qeent maoh ogs bail samp kgeenl dangc ogl ,ogs bail liog kgeenl dangc tiinp。 ogs bail dongl
 wangp : ogs bail singp jiuu ,ogs bail banc liongc ,ogs bail daeml nyaemc ,ogs bail liih biingc senp
 miiul ,ogs bail ngox kuaip senp kuangt .ogs bail xip wangp: ogs bail gueengv bongl ,ogs bail
 gueengv yemv ,ogs bail senp xup ,ogs bail senp ngegx ,ogs bail senp maoc ,ogs bail jaih douc
 senp mags ,qeent maoh ogs bail jus jiuc jaih max , ogs bail jaih mags lagx gkout .qeent ogs bagl
 Wangp : qeent laos senp semc ,qeent bail senp kgongx ,qeent bail senp gkout .qeent bail xip nyih
 jul ,dul bail xip nyih xeenent ogs namc wangp :qeent laos gueengv gengs ,qeent laos gueengv
 woup ,qeent bail jogc biingh ,qeent bail senp longh dongh danx. Maenl naih xah deic maoh gaos
 jenc pangp ,gaos qangp yongh 。 jodx naih bail mus , nyih jus bail lenc .bux noup yagp kgangs
 ,nyac xah deic maoh yags kgac , neix noup yagp kgangs ,nyac xuh deic maoh wagt nyeih .deic
 maoh bail teenp nyinc teenp jemv ,weenh nyinc yah daengl weenh jems .daih mus nyih jus bail
 lenc ,baov nyac daih nyih tenp kgongs ,buix saip maoh jonv map daoc dongh kgeel jongl ,saip
 maoh nyaol nyongs kgeel jegx .

(昔乾隆帝の時に真実を言うと伝えられている/嘉慶帝の時は真を述べる/光緒帝の時代になり/咸豊帝に宣統帝に民国に/三十九年間世の中を治め/今は皇帝が替わった/西暦2012年に替わった/何月になっただろうか/七月に入り立秋になった/今日はこの月の上旬/呉家の一族/父親は噂を招き/母親も関わっている/不幸にも忌みの時/お出かけは順調ではなかった/門の後ろの「白口」に出遭った/噂は村中に広がった/今日の壺には九斤の酒がある/家鴨は三斤/お宅の祖先の供え物にする/ご先祖様が前と後ろをよく見て/左と右すべてに気を配り/「白口」を門の外へ追い払う/遠くへ遠くへ/東方へ追い払い/「寨門」の外へ追い払い/「龍尾」から外へ追い出し/「岩塘」まで追い出し/「黎明」のミャオ族の村まで追い出し/「黎平」の広い場所に追い出す/西方へ追い払い/「光脚」まで追い出し/「光応」まで追い出し/「述洞」まで追い出し/「額洞」まで追い出し/「茅貢」まで追い出し/「寨頭」の広い地方まで追い出し/「九潮」「宰麻」まで追い出し/「豊登坳」の外へ追い出す/北方へ追い払い/「銅関」まで追い出し/「宰拱」まで追い出し/「口江」へ追い出し/十二の省へ追い出し/十二の県へ追い出す/南方へ追い払い/「光埂」まで追い出し/「光否」まで追い出し/「竹坪」まで追い出し/「新洞」と「苗蘭」から追い出す/今日これを高い山の嶺に押し出し/槍で刺し殺す/この時刻から/これから以降/もし男が悪口を言えば/あなたは彼の口を裂きなさい/もし女が悪口を言えば/あなたは手で口を叩きなさい/千年もその姿を消えるようにさせ/万年蘇る

ことが無いようにさせる/今から今後/家の中の先祖に祈願する/再び家に来て災いを起こすことないようにしてください/これで今から今後は家の中は無事になる)



写真4：「小白口」儀式（2012年7月撮影）

儀式の合間にこの家の主人に尋ねてみると、彼は皮膚病を患い、黎平県病院で治療したが、何の効果もなかったので、娘が働いている広東省に行って治療を受け、やっと治ったという。村に戻り、「鬼師」に見てもらった結果、周りの噂が病因であるといわれ、念のため、この儀式を依頼したのである。

まじないの内容から、「白口」は門の後ろに隠れ、それに遭ったことで、噂は村に広がり、それが主人の健康に影響を与えたことがわかる。「白口」は噂・喧嘩などのトラブルを引き起こす「怪」であり、「白口」と呼ばれるように、言霊信仰が背景にあり、これを駆除する呪術もやはり言霊の力を借りている。この「怪」を東西南北の四方へ追い出すのであるが、唱えた地名はすべてその通り道にある実際の村名である。この「白口」の駆除は「鬼師」が道教の神々を呼んで行うが、祝詞の内容からわかるように、特にこの家の先祖を呼んで助けをもらっている。



写真5：「指路碑」（2013年2月撮影）

トン族の村落を抜け出る分かれ道に、「指路碑」と呼ばれる石碑が多く見かける。岩洞寨にも「jaih longc」から南の方向へ行くと、分かれ道のところに多くの石碑が立てられ、「弓を引けば弦が切れ、矢が来れば碑で当てる、上は七洞へ行き、下は岑トへ行く（弓开弦断，箭到碑当，上走七洞，下走岑ト）」などの文字が刻まれている³³。これらの石碑は子供が病気になったときなど、依頼者が「鬼師」の指示に従って立てたのであるが、「小白口」と同様、穢れた存在を村の外へ追い出すためのものであり、これによって村の清潔が保たれ、人々の健康が守られるのである。

三、この世とあの世

トン族の村ではお正月に「鼓楼」で「大歌」の掛け合いを展開するが、その歌詞に「この世」と「あの世」の言葉が頻出する。調査対象者に歌詞の内容を確かめていくうちにその様相が見えてきた。まとめると以下のとおりである。

- (1) 人間の生前いた場所は玉帝が支配する世界であり、閻魔が支配する世界である³⁴。
- (2) 「薩」はすべての「土地神」を管轄し、この世とあの世を支配する³⁵。
- (3) 玉帝が男女の縁を決める³⁶。
- (4) 閻魔が男女の縁を決める³⁷。
- (5) あの世で同じ船に乗った男女は、ともに橋を渡ってこの世に生まれ、夫婦の縁を結ぶ³⁸。
- (6) 人が亡くなれば、「ダイダン川（nyal daih dangc）」という場所に行く³⁹。

夫婦になる運命は、あの世で玉帝（天上最高地位の神）、又は閻魔（地下最高地位の王）が決め、そして「二人は同じ花船に乗り/手を取り合って花橋を渡った」（「城牆」第4節）・「閻魔のところから一緒にこの世に来た/一緒に花船に乗り/川を下ってきた」（「恋人」第8節）のである。「同じ船に乗った」「ともにこの世に来た」という歌詞は「夫婦になる運命」を意味する常套的表現になっている。

では玉帝はどこにいて、閻魔はどこにいるかと尋ねると、この世界と同じ空間にあり、人間の目には見えないと答える⁴⁰。玉帝も閻魔も漢族の世界観を匂わせるもので、本来トン族の信仰ではないだろう。歌で歌われたように、トン族の中で死後行く場所は「ダイダン川」であるが、ほかに「十八羅漢山」（黎平県岩洞鎮宰拱村付近）⁴¹・「平白地」（黎平県肇興郷付近）⁴²・「榕江九十九瑙」（榕江県栽麻郷豊登坳村付近）⁴³といった所がある。「十八羅漢山」の場合は、死者に声をかけた途端姿が見えなくなるが、「平白地」と「榕江九十九瑙」は、死者に会いに行く人が多く、いつまでも悲しみに耽るので、老人たちは通路に犬の血を掛けて閉ざしたという。つ

まり、トン族の中で人間が死後行く世界は、天上でもなく、地下でもなく、地平線上の山中にあり、数十年前まで人々がその場所に行けば死者に会えたのである。夫婦の縁が決められ、「あの世」から「この世」に生まれ変わる場合、橋を渡ったり、船に乗って川を下ったりすると歌われるのも、二つの世界は同じ水平でつながっていることを物語る。

トン族の村において、何かの事故に遭って、若くして亡くなった人は村の墓地に入ることができず、道端に埋まる決まりになっている。昔、岩洞寨「シジュ」に火事で10人の女の子が亡くなり⁴⁴、村はずれの口江に行く方向の道沿いに埋まった。娘たちの幽霊は常に村に戻ってさまよい、それに出遭えば、病気になるという。現実起こった「事件」として次の話が語られている。岩洞寨南の口江郷に呉定邦という有名な「歌師」がいて、いつも歌手たちを率いて都会で公演活動を行った。十年ほど前に病気で亡くなり、棺を故郷へ運ぶことになったが、例の10人の娘の墓地近くを通ったとき、何の理由もなく車のエンジンが止まった。当時は夜9時ごろになっており、2時間経っても運転手は原因を突き止めることができなかった。同行のある老人は、亡くなった10人の娘が引き留めたのではないかと思い、「お爺さんよ、もう歌はやめて、家に帰りましょう」といったら、車のエンジンは正常に稼働できたという。これに似た話はほかにもある⁴⁵。ここの墓地も「あの世」の一つになっている。「十八羅漢山」・「平白地」・「九十九璫」の様子は、美しい「鼓楼」があり、皆が「楽しく歌を歌っている」のに対して、道端の墓地の幽霊は安住できず、「餓鬼」になって、いつまでも村の周辺をさまようのである。

またこの世に未練を持っている幽霊は離れようとせず、生前愛した人を困らせたり、娘の形相をして、村の中をさまよったり、若い男女が歌の掛け合いをする「行歌坐夜」に参加したりする。そういった女性の幽霊は「変婆」と呼ばれ、常に近辺の村で目撃される。現地ではこういった幽霊との「接触」を実際起こった「事件」として語り継がれている⁴⁶。「変婆」のいるべき場所は不明であるが、おそらく上の道端の墓地と同じ性格のものだろう。

四、まとめ

以上で見たように、トン族の村では「生業空間」と「生活空間」が存在し、その空間にある居住区域はさらに細分化されている。「生活空間」の内と外の性質について、村人たちは明らかに異なる認識をもっている。「生活空間」の外側に比べれば、内側は「土地神」が守ってくれるので清潔であり、家の外側に比べれば家の中は祖先が守ってくれるので清潔である⁴⁷、といった意識が存在する。

さらに、村落には「鼓楼」・「薩壇」（または「薩房」）・「土地神」の祠・大木・大きい石・橋・墓地などの聖域が「生活空間」に点在する形で分布している。それ以外は俗の空間であるが、人間の目には見えない「鬼怪」が時々村の外から入り、さまよったりする。俗の空間の清潔を

保つために、常に措置をとらなければならない。「忌寨」・「忌家門」・「大白口」・「小白口」などの儀式はそのためのものである。

「あの世」と「この世」は同じ空間を共有し、人間が死後いくとされる場所は、「この世」と同じ地平線の山中にある。そのような死後行く場所は数か所あるが、いずれも歌によって伝えられてきており、トン族の村人はそれを真実として信じている。「あの世」で玉帝と閻魔に夫婦の縁が決められて、ともに「この世」に生まれ変わり、夫婦として幸せな暮らしをするようになる⁴⁸。

このような独特な空間意識は村の歌行事と深くかかわっている。「攔路歌」はトン族村の空間意識に基づいて成立した行事である。「攔路」の習俗はトン族だけでなく、ミャオ族などほかの民族にもみられるが、歌の掛け合いを通して来客の穢れを取り除き、「生活空間」の清潔を保つのはトン族独特なものであると言える。「鼓楼大歌」は「祭薩」行事と一体になっており、村の守護神を村に降臨させて行われた行事であるので、参加者は神と同じ空間に身を置いており、行事の全過程に守護神「薩」の存在が意識されている。その「薩」から身を守るためには、数々の禁忌事項を守らなければならないのである。

本稿では、村人の「空間意識」、および歌行事との関わり方を見てきたが、この「空間意識」はトン族の暮らしや文化を理解する一つのカギになると思われる。

*本研究はJSPS 科研費 23520446 の助成を受けたものである

注

- 1 「花橋」は「風雨橋」とも呼ばれる。大きい村では集落の中に幾つもの「風雨橋」が掛けられ、川を渡ったり、休憩したりする実用的な機能を持っている。「花橋」が村の入り口にある場合は、近くに「風水樹」と呼ばれる木を植えるのが一般的である。
- 2 「寨」はトン語で「jaih」と呼ばれ、村を意味するが、「寨門」は独自の名称を持つ。
- 3 宗族、また居住区域を単位に建てた「塔」に似た木造建築。普段は休憩場所として使われるが、住民全体にかかわる事がある場合は集会所として、春節の時は「大歌」を歌う場所として使われる。
- 4 「薩壇」と「薩房」はいずれも「薩」という守護神を祭る場所。
- 5 トン（侗）族は言語と文化の差異により、「南トン」・「北トン」に分けられているが、「北トン」地域は漢族文化の影響が大きく、村の景観も「南トン」の村とは異なる。伝統がよく保存された「南トン」の村はさらに、「鼓楼」の近くに「戲台」が設けられていることと、「鼓楼」の近くに牛舎が設けられている（闘牛用）ことが特徴に加えられる。
- 6 平成23年度から平成25年度の間、筆者は文部科学省科学研究費による研究で、この村を主な調査地とし、6回にわたって実地調査を行った。本稿はそれに基づいたものである。調査過程で整理した日誌・

観察記録・聞き取り・歌謡資料などは調査研究報告書としてまとめた（『中国トン族歌謡生態の記録とその研究』－関西外国語大学図書館蔵）。本稿の執筆過程においては、岩洞小学校教師呉良明さんの協力を得た。

- 7 調査対象者は岩洞寨の「ジャイロン (jaih longc)」に住む呉学亮さん（男性、2013年現在83歳）。
- 8 呉学亮さんの話によれば、「龍」が雄か雌かは羅針盤を見て判断するという。村の北にも「龍」がいるが、村からはやや遠い。その後、何人かの村人に尋ねてみたが、東と西の「龍」だけはみんな知っており、北と南の「龍」は知らない。地形的には、東側と西側の山が岩洞寨を抱え込んだ形になっている。
- 9 社会主義制度に基づいた、生活用品を供給する拠点。その後、国有の商店に変わる。
- 10 「龍」の魂を象徴するもの。
- 11 道祖神的性格の神。
- 12 『史記・貨殖列伝』に「楚越之地、地広人稀、飯稻羹魚...」とある。
- 13 子供が生まれると、すぐ「鬼師」にあの世からこの世へ来るとき魂が通ったとされる橋を占ってもらい、一生その橋を拝み、愛護する。
- 14 呉良明さんの話による。
- 15 調査対象者は呉良修さん（男性、2013年現在70歳、「サタォ」に居住）。
- 16 交流の約束を交わした二つの村は数年おきに互いに訪問する。その際、村に数人の留守番の老人を残し、ほかはすべて訪問先の村に赴く。滞在期間は3日か5日が一般的だが、7日か9日に延ばす場合もある。受け入れの村は100人以上の来客を招待しなければならないので、期間が長くなると負担が大きくかかる。
- 17 トン語の文字整理と中国訳は呉良明さんによるもので、日本語訳は筆者による。以下同じ。
- 18 「声が踏まれ」「歌が踏まれ」というのは比喩的な表現で、来客が村に滞在する期間に行われる「鼓楼大歌」などの行事に影響を与える意味である。
- 19 この居住区域のことを、トン語では「ジャ (Jadx)」呼ぶが、漢語では、「部落」・「鼓楼」・「境」などの言葉が使われ、統一した表現はない。
- 20 「シジュ」はその後、現在の「ジャシャオ」と「ジャデォ」に分かれた。
- 21 この事件は1926年に発生したのものであると「寨門」の近くの石碑に刻まれている。岩洞の歴史上の大事件であるので、長く語られてきた。戦いを指揮した軍の長官が幼少時代、この村でいじめを受けたことがこの軍事作戦の背景にあるとされている。
- 22 呉良修さんの話による。
- 23 この二つの区域はいつも「ジャデォ」を相手に「鼓楼大歌」の掛け合いを行ったという。
- 24 「薩壇」は石で積み上げた円形の祭壇で、上に傘を挿してあったり、常緑の木を植えたりする。周りを柵で囲む場合もある。「薩房」は「薩の家」の意味で、屋根があり、瓦が敷かれた小屋の形をしている。「薩壇」に比べれば、「薩房」は密封した空間である。岩洞寨には「薩壇」と「薩房」それぞれ一つあったが、「薩壇」は文化大革命の中で破壊され、その後再建していない。現在は「シジュ」に「薩

- 房」があるだけである。
- 25 この二つの建物の性格をめぐって、詳しく考察を行ったことがある（「中国トン族〈鼓楼〉の文化的機能について一堂安寨と岩洞寨の事例から」、関西外国語大学『研究論集』97号、2013年3月）。
- 26 管理者は世襲制になっており、「鬼師」と同じ役割を担っている。
- 27 岩洞寨「ジャシャオ」の「薩房」管理者呉徳福さん（男性、2013年現在80歳）の聞き取り調査による。
- 28 「鬼師」のことである。
- 29 岩洞寨「ジャシャオ」の場合は野生のブドウの葉っぱを取って、「薩房」の中で煮る。
- 30 「天馬」は三蔵法師が乗ったとされる馬のこと。三蔵法師は成仏したが、乗っていた馬が放置されたので、この馬が災いを起こすという（「鬼師」呉継仁さん〈男性、1963年生まれ、岩洞寨「ロンコン」に住む〉の聞き取り調査による）。
- 31 「鬼師」呉継仁さんの聞き取り調査による。
- 32 勾玉の形で、長さは10センチぐらい。片面は平らに磨かれている。二枚使うが、投げ落とされたとき、二枚とも平らな面が床に向ければ、神が到来したことを示す。
- 33 「指路碑」は「將軍箭」とも呼ばれる。漢代の李広將軍の虎を射る説話にちなんだもの（部下を連れて狩猟した時、夕暮れの頃に虎に出遭う。力尽く矢を放ち、近づいてみると、虎ではなく大きい岩であった。矢は岩深く差し込んだので、李將軍も驚く。その後何回試しても、矢が岩に差し込むことはなかった）。
- 34 「恋人（Singc nyih）」の歌詞による。上述の『報告書』に収録。以下同じ。
- 35 「祭薩歌（Kgal miot sax）」の歌詞による。
- 36 「城牆（Jaenl xingc）」の歌詞による。
- 37 「静かに聞く（Wanp wanp jangl kap）」の歌詞による。
- 38 「昼はあなた（郎）を思う（Maenl diiul liangp langc）」・「金色の梨（Duil mant）」などの歌詞による。
- 39 「お金の賭けをする（Sinc yax baoh）」の歌詞による。
- 40 呉良明さんの話による。漢語の「陰間」に訳されているが、生きた人間の目に見えない世界である。
- 41 「歌師」（村の歌の伝承を担っている人）莫培四さん（女性、1943年生まれ、岩洞寨「ゴンドン」に住む）の聞き取り調査による。現地では次の伝説がある。宰拱村周辺は、昔「五百地方」と言われ、同じ呉姓である故、内部の結婚は許されなかった。互いに愛し合った十八名の若者と十八名の娘はそれに反抗し、山に入って自殺した。これをきっかけに、支族が異なれば結婚できるようになった。その後、この山に入ったある人は偶然、彼らが楽しく歌を歌っているのを見かけ、声をかけたら、姿が見えなくなった。それ以降、この山を「十八羅漢山」と呼ぶようになった。
- 42 「歌師」莫培四さんの聞き取り調査による。「乃義」を主人公にした叙事歌に出てくる。「乃義」は川で魚を取るが、捕った魚の一部を返すよう、川の主「小鬼」に要求される。これに応じなかったので、「小鬼」は「乃義」の妻の魂魄を攫って行く。家に帰る途中、「小鬼」に連れ去られた妻の魂魄とすれ違い、妻の顔を見て一瞬振り返るが、深く考えなかった。家に帰って見ると、妻が病で倒れており、その後間もなく死ぬ。「乃義」は愛する妻に会うため「平白地」に行き、妻が亡くなる原因を知るよ

うになる。

- 43 「鬼師」呉継仁さんの聞き取り調査による。呉良明さんが祖母から聞いた話だが、彼の祖母は若いころ、若くして亡くなった夫（呉さんの祖父）に会うためにこの場所に行き、実際に会ってきたという。
- 44 同じ「歌班」のメンバーで、当時歌の練習をしていて、逃げ遅れて亡くなったという。
- 45 ほかの数例は上述の『報告書』に収録。
- 46 幽霊に出会った「事件」や「変婆」にまつわる話は、上述の『報告書』に収録。
- 47 「鬼師」呉継仁さんの聞き取り調査による。
- 48 「城牆 (Jaenl xingc)」・「静かに聞く (Wanp wanp jangl kap)」の歌詞による。自然信仰による「生まれ変わり」の事例もある。宰拱村の「風水樹」はある年から半分が枯れ、半分だけが緑になった。ちょうどその年、ある家では娘が生まれ、6歳のとき病気で亡くなった。その後、大木の枯れた半分はまた緑に蘇ったので、村ではあの娘は木の生まれ変わりであると信じられている（上述の『報告書』に収録）。

参考文献

- 馮祖貽等『侗族文化研究』（1999年、貴州人民出版社）
- 呉 浩主編『中国侗族村寨文化』（2004年、民族出版社）
- 呉文志等編『侗寨大観』（2004年、民族出版社）
- 貴州省民族事務委員会・貴州省民族研究所編『貴州六山六水民族調査資料選編・侗族卷』（2008年、貴州民族出版社）
- 楊永明・呉珂全・楊方舟『中国侗族鼓楼』（2008年、広西民族出版社）
- 石開忠・馮玉照『鼓楼・風雨橋』（2009年、貴州民族出版社）
- 張澤忠・呉鵬毅・米 舜『侗族古俗文化的生態存在論研究』（2011年、広西師範大学出版社）
- 余学軍『侗族文化的標識—鼓楼』（2012年、黒龍江人民出版社）
- 楊築慧『中国侗族』（2012年、寧夏人民出版社）

(にう・ちえんびやお 英語国際学部准教授)